

---

# 異世界で下克上

黒龍陣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界で下克上

### 【Zコード】

Z0248Z

### 【作者名】

黒龍陣

### 【あらすじ】

この物語は、主人公が、チート能力を持つて異世界へ行くというありふれたはなしです。

処女作で、駄作です。

こうゆうのが苦手な方は、お引き取りください。

## 第一話 空、飛んでる・・・ a r c (前書き)

“いつもだめ作者”こと、黒龍陣です。

駄作ですか？ どう楽しんでもらえたら嬉しいです。  
ではどうぞ。

# 第一話 空、飛んでる・・・arū

「どうも、自分佳山 健悟って言います。  
いきなりですが、今空にいて落ちてます。『冗談抜きで  
さつきまで自分の部屋で寝ていて、夢をみていた  
空を、飛んでいる夢を、んで気を抜いたら落ちた。  
そして今にいたる。」

「・・・もう恐怖も感じねえ・・・」

さつきまで喚き騒いでいたが、疲れて重力に任せている。  
さてなんでこうなったんだ?  
いつものは、よくある神によつて異世界にG.O.な、かんじな  
はず。

だが神にあつていない、能力ももつていない。

・・・いきなり死亡「フラグ?

はつ!?( ̄ ̄)

いやいや死にたくないし!、まだ能力がないと決まってないし!-

「ふむ、能力といえば・・・魔法、か」

そうして俺は駄目もとで呪文を唱え始めた。

「・・・フライ」

呪文を唱えると、重力に逆らしながら徐々に落下速度が落ちてい  
く。

「 キタ 」 ( 。 。 ) ( 。 ) ( 。 ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )

俺は助かったことと、魔法が使えたことに喜びながら大地に降り立った。

「こんなに、大地が恋しかつたのは初めてだ」

周りを見回すと草原だけ続いていた。

「まわりは、何もなしか、明らかに日本ではない、とりあえず荷物確認」

荷物は、水×2、カロリーメイト×2、携帯、ライター、マッチなどがリュックに入っていた。

## 服装はTシャツにジーパン

— ? なんだこれ、俺のじやないなあ

リエックのほかに少し大きめのボーチが腰に付いていた。

あ 手紙か挿んである。」

手紙を開け内容を読んでみる事にした。

『はじめまして神です』

いきなりだけど、その世界に君を飛はしておいたから好き勝手に生きていいから。

あとポーチの中の空間をいじって置いたからいくらでも物は入

るから、中にはこの世界のお金や道具、とか入つてあるからついでに、チート能力も付けてある。  
んじゃ、検討を祈るから。』

なんと適當な神だ！まあチートあるからいいや。

そうだほかに魔法使えないのかな？

ポーチの中身はあとでいいか。

俺は火の玉をイメージして呪文を唱えた。

「ファイヤー・ボール！」

さつきは急いでいたためわからなかつたが体の中が熱くなり、血の巡りが早くなる。

ここで俺はできると確信して力を、手の平に集中させる。

呪文を唱えたと共に直径30センチ弱の火の玉が出現。近くにいてもまったく熱くなく、それを遠くにあつた岩に投げつけてみた。

岩に直撃し一瞬に光が駆け戻つて爆発。爆発によつてできた熱風がこちらにも届いた。

煙が晴れると、10メートルのクレーターができていた。

俺はその様子をしばらく見て口笛を吹きながら反対の方向に歩いていった。

「・・・」これは俺が悪いわけじゃない、忘れよう、うんそうだ忘れよう

現実逃避しながら俺は・・・逃げた。b y 作者（笑）

「俺はけつして逃げたわけじゃない！？」

変な電波を受けながら俺は、人がいる場所に向かった。  
一時間くらいしてポーチの存在を思い出した。

「ちうてポーチになにが入っているか

ポーチを開いて中を覗くと、未来から来た青狸の四次元ポケット  
みたいになっていた。

「ぐちやぐちやじやないか、整理しないといけないなあ

ととりあえずいろいろ取り出してみた。

「えー、袋が十つ、腕輪、杖、マント、指なし手袋、鎖などなど  
袋には白金貨が一袋に百枚づつ、合計千枚。  
指なし手袋は普通、マントは頑丈。  
腕輪は、説明書が貼つてあった。

『～説明書～

この腕輪は、糸使い、自由自在に糸を操れる  
糸は腕輪から無限に出る。

目に見える糸や、見えない糸を出せる。  
腕輪から糸に魔力を通せば、岩も切れる。  
使用者は切れない。

腕輪についている宝石は、取れる、しばらくすれば元にもどる。  
宝石の方は、遠距離から操り糸を出せる。

\* 注意\* 魔力を込めて置かないと使用できない。』

ん~だいたいわかった。でも、あきらかに字がちがうなあ  
この神につかえている天使はたいへんだなあ

天使「へっくしゅん!・・・・・?」

さて次はっと、杖かな、30cmの長さ、先に赤い宝石が付いて  
いるけど。

あ、宝石に魔力が感じられる、魔石か?

「これはあとで、次は鎖」

これは、鎖の先にナイフが付いていて指輪も付いているなあ・・・  
・ H × ?

「まあマントを着て、腕輪と鎖を付けて、杖を持つと  
完璧に魔術師だなあ wwwww」

残りをポーチに仕舞い歩き出した。

さて、これからについて考えよう、まずこの世界は魔法が使える、  
現金は硬貨、少なくとも

中世時代=RPG、そして魔法は、威力が強すぎ。  
・・・・俺ってこの世界では最強?  
だが油断はできない、世界はそんなに生優しくない。  
慎重に行動しなければすぐにBADハンドだ。

異世界に来たんだからやりたい」とはたくさんある。

案1・世界征服

案2・英雄を目指す

案3・美人奴隸を買ってウハウハな生活をする

案4・静かにひっそりと暮らす

案1はできそりだけど、あとあと面倒なことになりそりだから却下。

案4は論外、あとは案2・3か、案2は成り行きでなるとしておいて。

案3の美人奴隸買つてウハウハな生活に決まりだぜ！……！  
王道を目指すぜ！俺！

ああ早くファンタジーな住人に会いたいなあ。  
その前に、情報がほしい・・・

## 第一話 空、飛んでる・・・ a r c o (後書き)

みんながまだつたでしょうか?  
次回は、できるだけ早く出します。

## 第一話 もうヤバモンスター！（前書き）

どうも黒龍陣です。  
今回主人公は壊れますWWW書いているだけおかしくなつてしまつた。  
ではどうぞ。

## 第一話 ザツそくモンスター！

どうも変態なんだみなオリ転生主こと佳山 健悟です。  
いま物陰に隠れています。  
なぜかって？それは數十分後に至る。

\*數十分前\*

さ～てどこいこつかねえ～  
ん？遠くで黒い煙が上がつている見えるなあ  
煙があるつてことは、少なくとも生命体がいるつてことだな。  
さつそく行こつ。

様子が見える位に近づき、近くにあつた岩陰に隠れて今に至るわけだ。

様子を見る限りでは、魔物が馬車を襲つているらしい、  
乗つているの商人か？何人か護衛をつけているけど、相手の数が  
ねえ・・  
ゴブリン、ゾンビみたいな犬、スライム、この三種類が馬車を襲  
つている。  
あの近くの森からきたんだなあ。

ゴブリンは、ざつと数えて20体くらい、ゾンビみたいな犬、あ  
あ面倒くさい、ゾンビ犬は、5体、スライムは10体。  
ゴブリンが、人を襲いそのおこぼれがゾンビ犬が貰つている。  
スライムは、まとわりついて自分の体の中に閉じ込めて消化して  
る。

うわあ、護衛のおっちゃん、がんばっていたけど後ろ注意しないと、後ろに回った、プリンがメイスでおっちゃんの頭を、トマトみたいにしたわ～～

そうそう、この世界の言葉が通じるかわかんないけど、理解できるみたい。

いつまでも言葉自体通じるかわかんないけど聞こえてくる。

「た、助けてくれ————！」

「！」の、化け物が————！

「おかえ————ん！、おとえ————ん！、いや————！」

ほらね聞こえるでしょ。  
いやー言葉わからなかつたらつて思つたらひやひやしたわ～。  
でもこれで大丈夫　あー安心したからお腹すこひつた。  
携帯だともうお腹過ぎ、お天等様も真上にいるし、カロメを食べますか。

ん～弁当とかあつたらいいんだけど贅沢は言えない。  
まあ腹減つているからいいか。  
それじゃいだきま～す。

ん？助けに行かないのかつて？冗談言つてんの？馬鹿なの？死ぬの？ｗｗｗｗ

たくましい護衛のおじさまがフルボッコ、一様剣術を習つたことはあるけど、

一対三十五、その他もいれてもあきらかに勝負は決まつていいし負け戦なんてやらんし、ここは静かにしているのが吉だ。

ん？森からなんが出てきたってデカ！？

それは「ゴブリン」だがあきらかに違うデカさ、雰囲気も違う、ボスっぽいから「ゴブリンキング」という名前にしてやる。う。

ん？リーダーっぽい人がキングゴブリンに立ち向かつたでもだめだったね、振り上げたキングゴブリンの腕で叩き潰され

てる。

・・・グロイ。よく見えないから上に上った、おおよく見える。まあとりあえずこいつら去つたあとに残つた馬車の中を漁るか。

「フワ～ッ・・・・

欠伸と一緒にグツとその場で背伸びをしてもう一度魔物達を見る。

うにゅ？なんかゾンビ犬の様子が変だなあなんか空中の匂いを嗅いでいるような・・・

あれ  
・  
・  
・  
?

( ) . . .

卷之三

( ; ) . . . ! ?

なんか吠えたしーうわー一斉にレバ見たし、レバちに走つてき  
たし。

「んて？！んてはれた？！」  
あれ、俺今、岩の上にいる

やせこやせこー、心のある俺ー、都えりー、こや都えんな感じりー、つ

て馬鹿やつてないで本氣で

逃げるしかないか、でもこのまま戻つたら過去を忘却した場所に

・・・・つまり、道は唯一つ。

「よつしゃ――――――突つ込むぜ――――――」

魔物たちに立ち向かっていった。

「リミット・ブレイカー――！」

呪文を唱えると今の身体能力の限界を超えて、音速の速さで走り出した。

「まず手始めにスライムから・・・フリーグス――！」

呪文を唱えるとたちまちスライムたちが凍りついた。  
ははははザマア――――――

「次は犬！てめえだ――――！」

お前のせいによけいな戦闘しなければならないか！  
無様に散れ――――――

ゾンビ犬達に向かいながら呪文を唱えた  
そして完成と同時に流鏑馬のごとく構え

「エアー・カッター――！」

呪文を唱えると同時に風でできた刃が犬達を切り裂いていく。  
ここまで時間が、10秒。丁度リミット・ブレイカーの効果が  
切れた頃だった。

たつた10秒か、連続で使うと体に負担が掛かる、最低3回まで  
なら大丈夫だろう。この時間で決めれば勝てる。

残ったゴブリン達は、なにが起きたのかわからず、ぼーと立つて

いた。

「お前たちは、醜いなあその醜さを俺が変えてやろ！」

どつかのナルシストみたいなことを言つたが、気にしてはいない、  
今の戦闘が楽しめればいいからなあ！はつはははははははは  
は！－！－！－！（暴走＆壊れていますw） by 作者

俺の声で我に返つたゴブリンたちは、一斉に襲ってきた。

おいおいせつかく人が綺麗にしてやろうとしているのに酷いなあ、

そうゆう奴はお・し・お・き

俺は呪文を唱えた

「フレア。アロー！」

イメージ通りに火矢が出現。

眼を走らせ狙いをさだめる仮想の弦を離した。

火矢は紅い軌跡を残しながら空を駆け抜け抜けて弓を持っていたゴブ  
リンに命中。

威力が強すぎるのか、腹に大穴が開き、周りのゴブリンたちも巻  
き込んでいく。

あと17体。

さてどうやつてあそぶかなあ 手足を打ち抜いて逃げられないよ  
うにしたあと、ゆっくり凍らかすかな？

それとも鎖で縛つてここに火の海でも浸かつてもらおうかな？

俺が考えていると、後ろからゴブリンが襲ってきた。

すぐさま呪文を唱えた

「リフレクション、考えている所をじやますんなよ」

「ゴブリンの前に壁があるかのよう」、遮られ一気に弾き飛ばされ  
2・3メートルまで飛んでいった。

え？ なんで殺さないかって？ いきなりおもちゃが壊れたら面白く  
ないじやん。

「・・・ そうだいこと考えた」

鎖でゴブリンキング以外のゴブリンを縛り一箇所に集める。  
抵抗しているが無駄無駄。

呪文を唱えた

「フリーズ・ランス！」

手元に氷の槍が出現、それを手に持つとまた少し長い呪文を唱える

「グラキエス・フラワー！、綺麗に散りな！」

氷の槍の先端に魔方陣が展開され、その槍をゴブリンがいるところに投げ付けた。

槍は白い軌跡を残しながら空中を駆け巡りながらゴブリンたちに命中。

槍は地面に突き刺さった途端に碎け散り、花が咲いた。

氷の花がまわりを巻き込みながら咲いた。

30メートルの氷の空間にゴブリンたちを閉じ込めた。

俺は右手を上げ静かに

「ブレイク・・・」

『パチン！』

指を鳴らしたと同時に氷の花は跡形もなく砕け散った。

あ～疲れた、魔力を使うと精神的に疲れる。  
後ろからゴブリンキングが『ガルルル』と黙犬の如き唸り声が聞こえる

「ん？ なんだまだ残っていたのか、あ～めんびくさいなあ・・・」

そう言つてゐる内にゴブリンキングが、一いつ瞬に走つてきた。

「ふ～ん、そんなに死にたいの？、ならその勇氣に称えて一撃で殺してあげる」

俺は呪文を唱えた

「アブソリュートゼロ（絶対零度）－」

呪文を唱えると同時にゴブリンキングの動きは止まりまわりの草木が凍つていく。

そして、『ゴブリンキングの氷像が完成！

ん～博物館に飾りたいほど綺麗に仕上がった。

さて、『ミミも片付けたし馬車を漁りますか。

数分後

大量 大量 収穫は、銅貨、半銀貨、銀貨、金貨、その他。  
結構お金もあつたし、装飾品もかなりあつた。ついでに地図もあつた。

いやあーさすが商人、これはありがたく貰つておこう。

それに、お金は金貨に銅貨が多く、金貨が十枚程度だつた。  
ん、これによるとこつなるなあ

こんな感じかな?まあどうにかなるわ

お天道様はまだちょっとしか傾いていないからこのまま行くか。

俺は、馬にまたがり町にむかって走り出した。一様馬に乗ったことはあるから。

## 第一話 やつやくモンスター！（後書き）

次回、町に行きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0248z/>

---

異世界で下克上

2011年12月5日20時09分発行